

アルボレの夜

児玉 由佳 (エチオピア)

「ぜひ見てほしいものがある」。
ホラさんにそう言われ、私は夜のアルボレを訪れた。

車から降りてヘッドライトが消えると、暗闇に包まれた。夜目がきくのか、わらわらと子どもたちが寄ってきて、手をつないでくる。懐中電灯の光の先に、人々の姿が浮かんで消えていく。

アルボレは、エチオピアの南部、ケニア国境に近いところに位置する人口一〇〇〇人ほどの半農半牧の村である。ホラさんは、四〇代半ば。この村で生まれ育ち、何とか村を「向上」させようと日夜奮闘している人だ。新政権になって役職は解かれてしまったものの、まだまだその意欲は衰えず、今はまた女性たちを組織してモロコシの酒を作り、それを売ったお金を貯めて粉挽きの機械を買おうと計画していた。

この村での現金収入は主として牛や山羊などの売買によって得られるのだが、これは男の仕事であり、女性の現金収入の手だてはひじょうに限られている。まとまった金を貯めるのは容易なことではない。そんな女性たちが病気や出産などで入院しなければならぬ場合に備えて、現金収入のある近くの町の人々にこの粉挽き機を使わせ、その使用料を基金にしようというの

だ。

粉を挽くのはこの地方の女性の重要な仕事のひとつだ。台になる平たく大きな石の上で一〇×二〇cmほどの石を使って、包丁を研ぐような格好で、一日中暇さえあれば粉を挽いている。挽かれた粉は、パンのようなものになったり、お酒になったりする。彼女たちの手の平には、例外なく「挽きダコ」ができていく。

ホラさんが見せたかったのは、彼女たちがお金を貯めるために夜集まって粉を挽いているところである。このモロコシの粉が一週間寝かされたあとお酒として週に一度の市で売られるのだ。

もう一〇時を回っているはずだが、まだ女性たちは集まっていなかった。夕食の後片づけが終わり、子どもたちを寝かしつけてから集まるという。

少し離れたところでは女の子たちが歌を歌いながら粉を挽いている。練習なのだ。小さい子たちは、一緒に歌を歌いながら先輩の手元を見つめている。

真つ暗なのにざわついている村を一巡して戻ってくると、粉を挽くために女性たちがぼちぼち集まってきた。外国人がいるのに気付いて、おばあさんや子どもたちもやってくる。不思議そうに私をながめ、

手の平をさすり、まっすぐな髪に触る。すでに一時を回ろうとしている。これからもっとやってくるらしい。世間話をしながら、みんなで粉を挽くのだ。

ホラさんが、外国人をダシにして彼女たちの前で演説を始めた。どうも外人も関心を示しているのだから、みんながんばれみたいなことを言っていて、檄を飛ばしているようだ。彼女たちは粉を挽く手を止めて、珍しそうにこちらを見つめ、はにかんだように笑う。

この村では、女の子は一人も学校に行っていない。男の子も、「いちばん賢いのに牛を任せて、それ以外を学校にやる」という。彼女たちはおそらく計算もおぼつかないだろうし、字も読めないのではないだろうか。ホラさんは、女性たちの協同組合を目標しているようだが、お金の管理や外部との交渉は、誰がするのだろうか。結局ホラさんが仕切ることになるのかもしれない。見物のつもりが見物されて、暗闇のなかを指を一本ずつ子どもたちにつかまらせて歩く。遠くからリズムミカルなダンスの音楽が聞こえてくる。昼間は人も見かけず埃っぽい村が、息を吹き返して動き出す。こうしてアルボレの夜はふけていく。

(こだま ゆか／広報部編集第一課)